

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成 30 年 7 月 6 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 経済学研究科

職名・学年 准教授

氏名 高野 久紀

助成の種類	平成 30 年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	2018 FMA European Conference		
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()		
発表題目	Lending maturity of microcredit and dependence on moneylenders		
開催場所	ノルウェー・クリスチャンサン		
渡航期間	平成 30 年 6 月 13 日 ~ 平成 30 年 6 月 17 日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	300,000円	
	使用した助成金額	300,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空券代	168,190円
		自宅・空港間交通費	8,200円
		空港・ホテル間交通費(片道540クローネ)	16,000円
		宿泊費、日当	84,000円
投稿料(60ドル)		7,000円	
	報告資料作成費	16,610円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)		

成果の概要

高野久紀

2018 FMA European Conference にて、

“Lending maturity of microcredit and dependence on moneylenders”

を報告した。本論文では、マイクロクレジットの返済期限が、融資資金によって行う投資がキャッシュフローを生み出す期間に比べて短いことから、消費平準化の動機を持つ借り手は、より柔軟な返済スキームを提供する高利貸しからもかなりの借入をする動機を持つことを示した上で、返済期限を延ばすことで、高利貸しへの依存率の低下、マイクロクレジットの利用率の増加、投資率の増加をもたらす、マイクロクレジットのインパクトを改善できることを理論分析により示している。

途上国の貧困層を対象としたマイクロクレジットの経済学の研究においては、従来、開発経済学の研究者による研究貢献が大きかったが、途上国の貧困層向けに事業用融資を行うという点では、企業の資金調達を扱うコーポレートファイナンスとも類似している部分がある。そのため、ファイナンス系の国際学会である FMA European Meeting に参加した。本学会では、特別にマイクロクレジットが一つの分野として学会を通してセッションを開催していたことも、非常に魅力的であった。

開発経済学では、マイクロクレジットのインパクトや、クレジット利用者のモラルハザードや戦略的不履行など、クレジット利用者に焦点を当てる研究が多いが、本学会では、マイクロファイナンス機関の資本構成や効率性など、クレジット提供機関に関する研究が多く、新鮮であった。その一方、統計分析の妥当性については十分な注意が払われていない研究がほとんどであり、経済モデルとより洗練された統計的手法を用いて既存の研究に対して貢献する余地が大いに残されている分野であることが分かった。特に、近年ではマイクロファイナンス機関に関するデータベースが拡充してきていることから、産業組織論を用いたマイクロファイナンス機関の競争関係・相互依存関係を分析するのは、有用であると思われる。また、マイクロクレジットのセッション運営を担当していた University of Agder の研究者が中心となって学会中もインフォーマルなミーティングが開かれ、研究ネットワークの拡大に大いに役立った。

自身の研究に関しては、モデルのインプリケーションが、リスクや繰り返しの借入を導入した場合にもどの程度成り立つのかに関して、有意義なコメントを得ることができた。これらの点に答えるためには、モデルをより一般化することが必要であり、現在近似的動的計画法のアルゴリズムを使ってモデルを解く方向で改訂を進めているところであるが、それによってより多くのオーディエンスの興味を引くことができることがわかった。また、この論文は、Best Paper Award を受賞することとなり、多くの人に研究を知ってもらう良い機会となった。